様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３０１０７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2013
課題番号：２４７２０１８４

研究課題名（和文）国内におけるスイスドイツ語研究の開拓とドイツ語学への貢献

研究課題名（英文）A pioneering study of Swiss German: A contribution to German linguistics in Japan

研究代表者
熊坂　亮（Kumasaka, Ryo）

北海学園大学・工学部・准教授

研究者番号：４０５７９９７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,000,000円、（間接経費）　300,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者は、わが国では未開拓の分野であるスイスドイツ語を対象とし、その音韻・形態・語彙・統語を含む言語構造と、方言使用や方言擁護などの社会言語学的現象を網羅した包括的記述を目指している。本研究では、その一環としてスイスドイツ語の動詞群に関する研究に取り組み、その構造的特徴について共時的および通時的観点から考察した。

研究成果の概要（英文）：I have been engaged in a comprehensive study of Swiss German from grammatical and sociolinguistic perspectives. As a part of this study, I considered in this research project, the structural characteristics of the verbal complex in Swiss German from synchronic and diachronic points of view.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ドイツ語学　ドイツ語方言　スイスドイツ語　スイス

## １．研究開始当初の背景

わが国のドイツ語学においてスイスドイツ語は、その存在はよく知られていながら、研究対象としてはほとんど注目されていない。近年のわが国におけるドイツ語学は、ドイツ語圏における研究と肩を並べつつあるほどの成果を上げており、理論言語学への寄与も大きいが、その対象は専ら標準ドイツ語であり、方言、特にスイスドイツ語への関心は非常に薄いというのが現状である。1985年に刊行された田中泰三・著『スイスのドイツ語』は、わが国で唯一のスイスドイツ語の解説書であるが（※本研究に申請した時点での状況である）、細部において誤謬が散見されるのに加え、理論的側面を欠く。また、方言使用の実態や、方言の社会的な位置づけなどといった社会言語学的な側面への言及がなされていない。この意味では、わが国のスイスドイツ語研究は事実上未開拓であるといえる。

一方、スイス本国では、民族主義的背景や言語擁護という動機もあったにせよ、スイスドイツ語研究に対しては早い時期から関心が集まり、様々なアプローチがなされている。古くは、各地の方言の音韻・形態・語彙に関して、Sprachatlas der Deutschen Schweiz (SDS; 1962-2003)のような方言地図や、Beiträge zur schweizerdeutschen Grammatik（1910-1941）/ Beiträge zur schweizerdeutschen Mundartforschung (1949-1982)のような個々の方言を扱った論集が刊行されている。

あるいは全スイスドイツ語の語彙を網羅した辞典 Schweizerisches Idiotikon は 1881 年に第 1 巻が刊行されているが、その編纂事業は現在も継続中である。また、チューリヒ方言など個々の変種についても辞書や文法書が出版され、方言記述への寄与が図られている。近年では、統語論的側面も研究者の注目を引くようになり、理論言語学にも大きく貢献しつつある。統語現象への類型論的アプローチとしては現在、チューリヒ大学の Elvira Glaser 教授の主導による方言地図 Syntaktischer Atlas der Deutschen Schweiz の編纂作業が進行中である。さらに、社会言語学的観点からの研究もさかんになり、とりわけ言語擁護や、公的な領域での方言使用に関する諸問題が注目されている。

## ２．研究の目的

研究代表者が目指すスイスドイツ語の総合的な研究の一環として本研究で目的としたのは、スイスドイツ語の統語現象を体系的・理論的に記述することである。これは、近年になってはじめて方言研究の対象となってきたこともあり、研究の蓄積が比較的手薄な統語現象に着手することで、スイスドイツ語の全体像を明らかにするという学界の取り組みに寄与することをねらうものである。

その際の手がかりとなるのは、Albert Weber: Zürichdeutsche Grammatik ($^{3}$1987) などのスイスドイツ語諸方言の文法書である。これらは音韻・形態・語彙、そしてまた統語などの面での様々な言語現象に網羅的に記述するものであるが、その諸現象がそれぞれの変種やスイスドイツ語、あるいはドイツ語の構造全体の中でどう位置づけられるかということについての体系的・理論的考察に乏しいという問題点を含んでいる。研究代表者は、これらの補完・修正という方法でこの問題を解決し、上述の目的を果たすことを試みた。具体的なテーマとしては、次の 2 点を考えた。

（A）スイスドイツ語の動詞群について
（B）スイスドイツ語の不定詞構文について

これらは研究代表者がかつての研究で扱った現象、および今回扱うことができない他の様々な現象と関連づけられると予測されるものである。これらのテーマに取り組むことを通じて、申請者の研究全体を補完し、また、スイスドイツ語の言語構造をより体系的に記述することを目指した。

## ３．研究の方法

1 年目は、上記（A）の研究に従事した。研究の初年度にあたり、スイスドイツ語研究あるいは方言学の関係図書・文献資料の収集を幅広く行い、また、言語データとして有用な一般向けのスイスドイツ語教材も収集した。

この中で扱ったのは、スイスドイツ語の不定詞を含む動詞群の右枝分かれ構造についてである。このテーマは、補足成分の位置の違いによる文の解釈の変化、および不定詞の性質との関連で、上記（B）「スイスドイツ語の不定詞構文」との接点を有すると考えた。

この動詞群の右枝分かれ現象を分析する際の論点の一つとしては、補足成分の位置の違いによりどのような意味的差異が生じるかという問題があったが、これについては、下記のもう一つの論点について記述すべき点が当初の予測以上に多かったことから断念した。

その論点とは、なぜ不定詞を含む動詞群だけが右枝分かれの構造をとるのかという問題である。チューリヒ方言など大部分のスイスドイツ語方言では、不定詞を含む動詞群とは異なり、過去分詞を含む動詞群は、現代の

標準ドイツ語と同様に左枝分かれ型の構造をとる。この点について、ドイツ語の不定詞と過去分詞の性質の違いという観点から考察した。オランダ語など、他のゲルマン系言語における不定詞や過去分詞の性質も適宜参考にした。

1 年目の段階では、当初計画していた口頭発表や論文等による研究成果の公表、また、インフォーマント調査、現地での研究者との意見交換には至らなかった。これらは 2 年目に持ち越しとなった。

なお、2 年目は、上記(B)「スイスドイツ語の不定詞構文」の研究に取り組む予定であったが、上記のテーマを膨らませるという方針に転換したため、これを断念し（A）の研究を継続した。

## ４．研究成果

成果としては、以下の 2 点に関する知見が得られたことが挙げられる。一つは、スイスドイツ語の全体構造という観点からのもので、スイスドイツ語の動詞群の構造における地域差に関することである。もう一つは、ドイツ語史における位置付けという観点からのもので、古高ドイツ語から初期新高ドイツ語における動詞群の発達に関することである。

下記「雑誌論文①」（下記「学会発表①に基づく」）は、スイスドイツ語チューリヒ方言の動詞群の語順について、チューリヒ方言における他の様々な言語現象と関連付けながら概説することを目的とするものである。

この中では、まずチューリヒ方言において「右枝分かれ」の動詞群を形成する動詞の種類について観察した。話法の助動詞だけではなく未来・推量の助動詞や使役動詞、知覚動詞、あるいはその他、不定詞を支配するいくつかの動詞といった、不定詞を支配する動詞全般がこれに該当する。また、動詞群の内部構造については、動詞のみが 2 つ以上連続して動詞群を形成する語順だけでなく、目的語などの文成分が動詞群に埋め込まれる語順も可能である（例：de Joggel hät es Gottlett welen$_1$ ässe$_2$ / de Joggel hät welen$_1$ es Gottlett ässe$_2$；標準ドイツ語 Jockel hat ein Kotelett essen wollen に相当）という点に言及した。

そして、動詞群に埋め込まれる目的語等の文成分について、１）代名詞の形式に関する制約、２）前置詞句の位置に関する制約に着目して考察を行った。１）については、弱形（接語形）の人称代名詞を動詞群に埋め込むことはできない、あるいは動詞群に埋め込むには、文アクセントをもつことができる強形である必要があると結論付けた（例：Iir hetted emaal echli chöne$_1$ {ire / *ere} is Gwüsse rede$_2$；標準ドイツ語 Ihr hättet ihr einmal ein bisschen ins Gewissen reden können に相当）。２）については、動詞との結びつきが強い前置詞句は枠外に配置することができないと結論付けた（例：du häsch mi {welen$_1$ uf der Aarm nëë$_2$ / uf der Aarm wele$_1$ nëë$_2$ / *wele$_1$ nëë$_2$ uf der Aarm}；標準ドイツ語 du hast mich auf den Arm nehmen wollen に相当）。

最後に、チューリヒ方言に独特の不定詞構文を中心に、チューリヒ方言が不定詞を右側に置く傾向のきわめて強い言語であるということを示す様々な現象に言及した。この中では、１）z 不定詞（句）を上位の動詞の右側に配置することが義務的であるという点（例：dass si probiert d Vögel z filme / dass si d Vögel probiert z filme / *dass si d Vögel z filme probiert；標準ドイツ語 dass sie probiert, die Vögel zu filmen に相当）、および２）aafange「始める」や uufhöre「やめる」のような z 不定詞を伴わない動詞もまた下位の不定詞を右側に置くことが義務的であるため、助動詞などによる動詞群と同様の語順をとるという点から、チューリヒ方言では z の有無にかかわらず、不定詞という形をとるものは必ず上位の動詞の右側に置かれるという一般化が可能であるということを示した。また、３）スイスドイツ語に独特の「～しに行く」の表現もこの枠組みで捉えられることを示した（例：ich gaane go fische / mer sind uf de See ggange$_1$ go$_2$ ruedere$_3$；逐語訳 ich gehe gehen fischen / wir sind auf den See gegangen gehen rudern）。

さらに、下位の不定詞を右側に置くことが義務的であるという事実を如実に表すものとして、４）zum 不定詞構文という、いわば名詞化された不定詞がさらに目的語など様々な文成分をとる、標準ドイツ語では通常用いられない前置詞句の中の動詞群においても複数の動詞が「右枝分かれ」の構造をとるという現象（例：i hä z wenig Gält ghaa zum chöne$_1$ boue$_2$；標準ドイツ語 ich hatte zu wenig Geld, um bauen zu können に相当）、および５）複数の動詞を含む z 不定詞句において、本来置かれるべき上位の不定詞の前ではないところに z（標準ドイツ語の zu）が置かれるという現象（例：er hät versproche de Hund la$_1$ z schwüme$_2$；標準ドイツ語 er hat versprochen, den Hund schwimmen$_2$ zu lassen$_1$ に相当）にも言及した。

下記「雑誌論文②」（下記「学会発表②に基づく」）は、スイスドイツ語における動詞群の構造的特徴について共時的および通時的観点から概説するとともに、下位の動詞が過去分詞であれば語順は左分岐型となるが（例：das er schwèèr gschafft$_2$ hät$_1$；標準ドイツ語 dass er schwer gearbeitet$_2$ hat$_1$ に相当）、

下位の動詞が不定詞であれば語順は右分岐型となる（例：das er schwèèr mues$_1$ schaffe$_2$；標準ドイツ語 dass er schwer arbeiten$_2$ muss$_1$ に相当）という差異が生じる要因について、関連現象に言及しながら考察することを目的とするものである。

この中では、チューリヒ方言を例に下位の動詞が不定詞である動詞群を概観したのち、動詞群の語順の地域差という観点から、そして歴史的観点からも過去分詞が支配される動詞群の方が不定詞が支配される動詞群よりも左分岐型の動詞群を形成する傾向が強いということを示した。

そして、過去分詞の形容詞的性格に着目し、過去分詞が支配される動詞群と不定詞が支配される動詞群の語順における差異の要因についての考察を行った。この中では、過去分詞の方が不定詞よりも左分岐型の語順をとる動詞群を形成する傾向が強いということを示すとともに、過去分詞の形容詞的性格がこのことに関与すると結論付けた。

また、過去分詞の形容詞的な性格が反映されている現象として、過去分詞の語尾変化について言及した（例：dass ts Doorf net pschadiguts$_2$ choma$_1$ va dar Löuwwanu；標準ドイツ語 damit das Dorf nicht von der Lawine beschädigt werde に相当）。これは、過去分詞と形容詞の共通性が現れており、かつ現代の標準ドイツ語にはみられない現象であるという点で注目に値するものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

①熊坂　亮、スイスドイツ語チューリヒ方言の動詞群の構造について、エネルゲイア、査読有、39 号、2014、33-53

②熊坂　亮、スイスドイツ語の動詞群の語順について、Sprachwissenschaft Kyoto、査読有、14 号、2014、17-37

〔学会発表〕（計　２件）

①熊坂　亮、スイスドイツ語チューリヒ方言における動詞群の語順について、ドイツ文法理論研究会 2013 秋の研究発表会、2013 年 9 月 29 日、北海道大学

②熊坂　亮、スイスドイツ語の動詞群の語順について、京都ドイツ語学研究会、2013 年 12 月 14 日、キャンパスプラザ京都

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
熊坂　亮（KUMASAKA, Ryo）
北海学園大学・工学部・准教授
研究者番号：４０５７９９７６

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：